Ⅲ　研究のあゆみ

1　研究主題・副題

生涯にわたって運動に親しむ資質や能力の基礎を育てる体育科学習の在り方
～「ボール運動」における主体的・対話的な授業の展開～

2　主題設定の理由

現在日本は、グローバル化や少子高齢化による生産年齢人口の減少、人間関係の希薄化、コロナウイルスによる影響など多くの問題を抱えている。その社会の変化の中で、様々な問題に対して長期的な見通しをもって、主体的に社会にかかわり、解決に臨むことが求められている。また、２０２１年へ延期された東京オリンピック・パラリンピックの開催も迫っており、日本国民の体育・スポーツへの関心は更に高まってきている。

そんな中、ＩＴやＡＩといった急速に発展してきた情報化によって生活が便利になる一方で、児童の体力低下、人間関係の希薄化などの課題があがっている。

このような課題を受けて、児童の体力向上はもちろん、多様な変化の中で直面する問題に主体的にかかわり、自分一人だけの意見だけでなく他者との話合いを通して、より良い生活を送ったり新たな価値を創造したりする力が求められている。

東臼杵地区は、門川町、美郷町、諸塚村、椎葉村の４つの小学校体育連盟が集まって構成されている。多くの小学校が小規模であり、自然に囲まれ、児童は温かい人間関係の中で育ってきている。その一方で、近くに公園や運動施設がなかったり、バスや車の登下校で日常的に運動不足に陥ったりしている。また、スポーツ少年団などの活動も各校でばらつきがあり、特にスポーツ少年団がない山村地域の小学校では、学校以外での運動をする機会がほとんどないのが実情である。そのため、運動能力の二極化が児童間で広がっている地区もあり、運動の機会が極端に少ないまま大人になってしまう可能性もある。人間形成において重要な時期である小学校段階に、運動に親しむ資質や能力の基礎を形成することは生涯にわたってスポーツに親しみ、健康な生活を送る上で大変重要である。

東臼杵地区では、研究主題を「生涯にわたって運動に親しむ資質や能力の基礎を育てる体育科学習の在り方」とし、４つの町村それぞれの小学校で児童や学校、地域の実態に応じて副題を設定し、研究に取り組んできた。

そこで、各学校での取組を継続させながら、児童がより主体的に運動にかかわり、対話的で深い学びを実現するための手立てを講じることができれば、健やかな心と体を育み、生涯にわたって運動に親しむ資質や能力の基礎を育てることにつながるのではないかと考え、本主題を設定した。

3　研究目標

ボール運動における主体的・対話的な授業の展開を通して、生涯にわたって運動に親しむ資質や能力の基礎を育てる体育科学習の在り方を追求する。

4　研究仮説

ボール運動における主体的・対話的な授業を展開するために、関わり合いを重視し、自分たちでルールを考えていける学習を計画すれば、児童は主体的に運動に関わり、運動の楽しさを味わい、生涯にわたって運動に親しむ資質や能力の基礎が育つであろう。

5　研究内容

(1) 単元の学習計画の工夫　(2) 関わり合いを重視した学習の展開　(3) 必要感のある教師の関わり

5　研究の構想

【研究主題及び副題】
生涯にわたって運動に親しむ資質や能力の基礎を育てる体育科学習の在り方
～「ボール運動」における主体的・対話的な授業の展開～

【研究目標】
ボール運動における主体的・対話的な授業の展開を通して、生涯にわたって運動に親しむ資質や能力の基礎を育てる体育科学習の在り方を追求する。

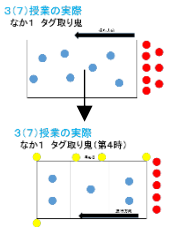
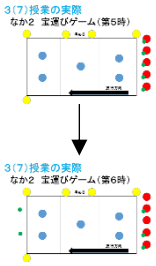
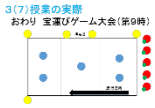
【研究仮説】
ボール運動における主体的・対話的な授業を展開するために、関わり合いを重視し、自分たちでルールを考えていける学習を計画すれば、児童は主体的に運動にかかわり、運動の楽しさを味わい、生涯にわたって運動に親しむ資質や能力の基礎が育つであろう。

【研究内容】
(1) 単元の学習計画の工夫
(2) 関わり合いを重視した学習の展開
(3) 必要感のある教師の関わり

6　研究の実際

(1) 単元の学習計画の工夫

児童が主体的に授業に取り組めるように、単元の学習計画を工夫した。具体的には、タグ取り鬼から宝運びゲームへと内容を発展させたり、自分たちでルールを考えたりさせるようにした。

第１時	第２時～第４時	第５時～第８時	第９時～第10時
はじめ	なか①	なか②	おわり
・オリエンテーション ・試しのゲームを行う。 	ねらい１ 「みんなが楽しめるタグ取り鬼のルールを考えよう。」 	ねらい２ 「みんなが楽しめる宝運びのルールを考えよう。」 	ねらい３ 「みんなで決めたルールで宝運びゲーム大会をしよう。」 
子どもたちが考えたルール（一部）			
・線から出た人は、５秒待ってから入る。	・ゴールをしたら１点。 ・線をひいて守備範囲を決める。	・ボールを置いたら１点。 ・ボールをゴールまで運んだ人は、仲間とパスをしてよい。 ・ボールが外に出たり、取られたりした場合はスタートに戻る。	

(2) 関わり合いを重視した学習の展開

児童が対話的に授業に取り組めるように、関わり合いを重視した学習の展開を行った。関わり合いを重視した学習とは、子どもたちの欲求（思い）をもとに、自分と他者と道具とを相互に関連付けながら、話し合う活動を多く取り入れた学習のことである。

授業では、単元全体の目標として、「みんなが楽しめるルールを考えよう」を設定し、その目標を目指して子どもたちは関わり合いを重視した学習に取り組んだ。児童は、ルールを考える際に、他者（みんな）がどう思うかを考えたり、道具をどう活用したりすればよいかを話合うなど、対話的な学びを行っていた。

意見を発表する児童

(3) 必要感のある教師の関わり

主体的・対話的な授業になるように、必要感のある教師の関わりを意識した。必要感のある教師の関わりとは、子どもたちの欲求（思い）を引き出すために、意見を出しやすい雰囲気作りを行ったり、ルール作成がスムーズに行くように、司会の役割を果たしたりすることである。子どもたちが主体であることを意識することによって、教師主導の授業にならず、主体的・対話的に学ぶ子どもの姿につながった。

司会の役割に徹する教師

7　まとめ（成果と課題）

(1) 成果

○　単元の学習計画の工夫によって、児童が主体的、対話的に運動に取り組むことができる「ボール運動」の授業を構築することができた。

○　関わり合いを重視した学習の展開によって、児童が必要感をもって授業に臨む姿が見られた。

○　教師の必要感のある関わりによって、教師主導にならず、主体的・対話的に学ぶ子どもの姿につながった。

(2) 課題

●　話し合い活動を多く取り入れたことによって、運動量を多く確保することができなかった。１単位時間の授業の流れを考え直す必要がある。

●　今後も児童が主体的･対話的に運動に取り組むことができる授業づくりを継続して行う必要がある。